

枝さんの悲しみとその肩にかかった責任の重みとは第三者にはとても想像できないものがあったにちがいない。その後、三十年代に入っておばあちゃんが、そして僕に親しみの表情で、ぼそりぼそりとよく話してくれた下働きのおえんさんが亡くなった。後楽館も淋しくなったな、という気持ちだった。

だが、最後に山を訪れた五十一年十二月、鶴久・喜久子ご夫婦が堂々と仕事をしておられるのを見て驚いた。とくに喜久ちゃんの余裕のある笑顔と話題とに、昔ながらの後楽館の面影をみたのは何よりもうれしいことだった。

今年二月、「姉妹会を伊豆でやったので、ちょっと足をのぼしてお見舞いに来ました」といって春枝さんとふみちゃんが拙宅を訪ねて下さった。一時間余りの雑談のあと別れ際に、「またお会いできると思います」「今度は山でお目にかかりましょう」と、それぞれの思いをこめての短いあいさつをかわした。あの湯殿の木の床にべったりと座ってゆっくり体に湯をかける。

木の感触と湯のぬくもりと——「ああ、この安らぎ

——」体の奥底からそういうことのできる日が来るような気がして、静かに心が動くのである。

秋の日の野菊の花にしむばかり

心淋しき山の別れか

うずみ火に吹雪の夜を語らいし

やさしき人を忘れやはする

(松本得三さんは、昭和五十六年七月十日、亡くなられました。)

へ一九八一年九月二五日『竹節春枝古稀記念出版 想い出の山彦』

## 松本得三氏 年譜

- 一九一五年(大正 四) 四月二六日 愛知県西加茂郡寺部町(現在、豊田市)で、父松本光三、母静、九人兄弟の三男に生れる。
- 一九一八年(大正 七) 三歳 三月 名古屋市白壁町に移る。
- 一九二一年(大正一〇) 六歳 四月 白壁小学校に入学。
- 一九二二年(大正一一) 七歳 名古屋市下堅杉町に転居、高岳小学校に転校。
- 一九二七年(昭和 二) 一二歳 三月 高岳小学校を卒業。
- 一九三一年(昭和 六) 一六歳 三月 明倫中学校を四年で修了。
- 一九三三年(昭和 八) 一八歳 第八高等学校(現在、名古屋大学)二年の時、初めて長野県地獄谷温泉の後楽館を訪れる。
- 一九三四年(昭和 九) 一九歳 三月 第八高等学校を卒業。ポート部に入っていた。
- 四月 京都大学法学部に入学。父親との信頼関係はあつく、弁護士になることを期待されていた。父親は茶室「不染庵」をもち、歌を嗜んだ。
- 一九三六年(昭和一一) 二二歳 東北大学文学部に行きたくて、進級試験受けず、一年留年。阿部次郎、西田幾多郎にひかれる。ポート部でボックスをつとめる。

一九三七年(昭和一二) 二二歳 晩秋、地獄谷温泉の後楽館に二か月間逗留。

一九三八年(昭和一三) 二三歳 四月一〇日 京都三條河原町教会でカトリック受洗。この頃「百万遍のお寺」に下宿して、毎日始発の市電に乗り三條河原町教会へ通う学生がいる」という記事が、『京都新聞』にのった。

一九三九年(昭和一四) 二四歳 三月 京都大学法学部を卒業。

三月三〇日 朝日新聞社に入社。編集局練習生となる。

六月一日 京都支局に勤務。

四月一日 京城支局に勤務。

一九四〇年(昭和一五) 二五歳 四月一〇日 歩兵第一八連隊(豊橋市)へ入隊。経理学校へ行く。

一九四一年(昭和一六) 二六歳 陸軍経理部見習士官に任官。陸軍主計少尉として北支派遣。

この頃、父親から送金を受け、本を購入し読書にはげむ。

陸軍主計中尉として北滿富拉爾基駐屯。一八九四部隊に所属。

一九四四年(昭和一九) 二九歳 一月一五日 一八九四部隊工兵隊部隊長海江田貢氏夫妻の紹介で、岡村国

五郎の四女幸子と山口県防府市で結婚。(知り合って二週間後であった。)

一月二〇日 渡瀧、フラルキで新婚生活。

一九四五年(昭和二十) 三〇歳 八月一五日 北安でソ連兵により武装解除。ラーダ次いで、マルシャンスクに抑留される。

八月二八日 妻幸子引き上げの途中、ハルビン桃山小学校教室で、長男哲郎誕生。

一月七日 奉天(現在、瀋陽市)で哲郎死去。

一九四六年(昭和二一) 三一歳 七月一六日 妻幸子博多に帰国。山口県防府市の実家に滞在中に「お茶やお花のおけいこでもして下さい」との手紙ソ連から届く。

一九四七年(昭和二二) 三二歳 一月 舞鶴に帰郷。愛知県寺部の実家で休養。

二月一日 朝日新聞社に復職。西部本社(小倉市)通信部員。単身赴任。

妻幸子山口県防府市の実家に滞在。

八月五日 山口県防府市で、次男道郎誕生。

四月二〇日 東京本社調査研究室研究員となる。単身赴任。研究報告『現代のカトリシズム』執筆。

九月二一日 父光三死去。

一九五〇年(昭和二五) 三五歳 三月一〇日 東京本社政治部員となる。労働、農林、参議院などを担当。メ

デー事件などを取材。

五月 東京中野相生町に家族とともに居を移す。

九月一八日 長女みちる誕生。

八月二三日 母静死去。

一九五三年(昭和二八) 三八歳 九月一日 東京本社連絡部次長となる。部員とユニフォームをつくり、野球をやる。ロシア人リジーア女史に自宅でロシア語を習う。「桜の園」原書で読んでから、芝居を見に行くという凝りようだった。

一九五七年(昭和三二) 四二歳 十一月一日 盛岡支局長となる。家族を東京においての単身赴任だった。

一九五八年(昭和三三) 四三歳 「若い支局員とまきストープを囲みながら語り合うことがとても楽しい」と家族に手紙を書く。ダンスを習い、ブルース、タンゴ、ルンバからワルツま

一九六一年（昭和三六） 四六歳

でこなすようになる。（妻幸子もその頃医者からすすめられ、東京三軒茶屋でダンスを習う。高血圧の治療のため。）

二月一日 名古屋本社報道部特信課員となる。

三月一日 名古屋本社報道部員となる。

三月末 家族、名古屋に転居。ゴルフを始める。名古屋大学でロシア語を聴講する。

十一月一日 名古屋本社社会部員となる。

一九六四年（昭和三九） 四九歳

三月一日 名古屋本社社会部特信課長兼ラジオ・テレビ室員となる。

一九六五年（昭和四〇） 五〇歳

十一月一日 名古屋本社編集委員となる。

一九六六年（昭和四一） 五一歳

一〇月一日 東京本社編集局勤務。単身赴任だった。

十一月一日 東京本社内政部長（初代）になる。万国博対策委員を兼務。この頃既に、公害問題や地方自治に深い関心をもっていた。

一九六七年（昭和四二） 五二歳

三月末 相模原市相模台団地に家族とともに住む。

九月一日 大阪本社編集局次長となる。宝塚市の売布に住む。単身赴任だったが、一年後、次男道郎と同居。

一九六九年（昭和四四） 五四歳

四月一日 論説委員（大阪在勤）となる。妻幸子と長女みちる、宝塚に移る。

二月二十四日 朝日新聞社を定年を前に依願退社。同社社友になる。妻幸子とともに相模台団地にもどる。

二月十五日 横浜市参与となり、同市企画調整室に勤務。「不染の記」をつけ始める。以後亡くなるまで一〇年余書き続ける。

一九七〇年（昭和四五） 五五歳

七月二三日 都市科学研究室長となる。

一九七一年（昭和四六） 五六歳

三月 『市民生活白書 横浜と私』を編集。また、以後『調査季報』を第二九号から四六号まで編集する。

一九七二年（昭和四七） 五七歳

九月一日 長女みちる、大倉正明と結婚。

八月 「住民要求と行政の対応」と題する市民意識調査を都市科学研究室で実施。それ以降、「市民と市役所の問柄」を主なテーマとした市民意識調査を実施した。

この頃、相模台団地で大型ダンブカーの乗り入れ反対の住民運動をやる。杭打を実行し、運動は成功。

一九七四年（昭和四九） 五九歳

二月 『市民生活白書 私の横浜』を編集。この頃から、朝日カルチャーセンターにヨガを習いに行く。

一九七五年（昭和五〇） 六〇歳

七月一日 都市科学研究室長を退任し、同室主任研究員となる。

この頃から、上智大学の「神学講座」聴講生となる。亡くなる年の五月まで受講した。

一九七六年（昭和五一） 六一歳

四月 ポーランドに行きたくなり、朝日カルチャーセンターで英会話を習い始める。（ポーランド行きは市長選立候補のためとりやめになった。）

六月三日 痛風で北里大学病院に行く。

九月二日 飛鳥田横浜市長から「相模原市長選に立候補して欲しい」との要請を受ける。

九月三日 「その器にあらず」と手紙を書き、飛鳥田市長に届ける。

九月二十八日 度重なる飛鳥田市長の要請に依りて、相模原市長選挙に立候補を決議。

十一月三日 横浜市参与、都市科学研究室主任研究員を辞し、横浜市を退職。

一九七七年（昭和五二） 六二歳

一月二三日 相模原市長選挙。結果は、前市助役の館盛静光氏（自民・新自由クラブ・民社支持）七万三六六票、松本氏（社共推せん・公明支持）四万九、七九四票であった（投票率 四八・九％）。

七月二三日 『77相模原市長選挙レポート』を発行。

一九七八年（昭和五三） 六三歳

七月六日 半蔵門病院に入院し、筋腫のため、胃を三分の二ほど切除する。

一九七九年（昭和五四） 六四歳

四月二八日 「旧約聖書」を原書で読みたくて、上智大学でヘブライ語の聴講を始める。

また、この頃から門脇神父の黙想会に参加し始める。

一月 此の頃から身体不調で新宿S病院に通う。

一九八〇年（昭和五五） 六五歳

一月一〇日 医師のすすめにより、北里大学病院に入院。

一月二三日 直腸ガン手術。

二月一日 愛犬ドン死亡。

三月一日 同病院を退院。抗ガン剤や丸山ワクチン接種のため、一日おきに通院。一年半続く。NHKドイツ語講座を受講開始。

一〇月二日 腸閉塞のため、再び北里大学病院に入院。

一〇月一五日 横浜市役所時代の文章を集めた『言葉と自治体』が発行される。

る。

一月一日 次男道郎、腰川イチ子と結婚。

一月五日 再手術。

一月二一日 退院。

一九八一年（昭和五六） 六六歳

三月 腹水たまり始め、容態悪化。

五月七日 秋川神冥窟（東京都西多摩郡檜原村）を道郎の運転する車で妻とともに訪れる。

五月九日 上智大学ワルケンホルスト神父の講座に出席。これが最後の聴講となる。

六月一日 北里大学病院で入院にふみきる手続きをとる。「後でこの日は大事な日となるかもしれない。この日をよくおぼえておくように。この一か月が重要な時だよ。」と妻幸子に語る。

六月一九日 衰弱がひどく、三たび入院。

七月一〇日 午後八時三五分死去。

七月一二日 東京都町田市、カトリック町田教会で葬儀。

一月一五日 京都市、カトリック京都教区衣笠墓苑に埋葬。

（本年譜は、幸子夫人の協力をえて、一〇余年にわたって書き続けられた「不染の記」等を参考に、岩垂弘、中川久美子、横山悠の三名が中心となり作成したものである。なお、年齢は満年齢で示した。）